

気ニナル視線

【シナリオ】

瀬井隆

1 誰かが見ている

「……また見られてる？」

はつきりと視線を感じた。やっぱり、誰かに見られている気がする。どうしてだろう？ そんなことあり得ないのに。

だって私はいま、家のトイレでしゃがんでいるんだもの。

ちゃんとドアを閉めて、鍵も掛けた。いくら自宅でも二十歳の女の子がトイレに入るんだから。

お父さんはさっき会社に出掛けたし、お母さんはベランダで洗濯物を干している。覗くような人なんていない。

あとはお兄ちゃんがいるけど……。
ううん。それはあり得ないわ。

用を済ませてトイレから出た。もちろん、慌てて走り去る影なんかない。

でも、だったら、たしかに感じた、あのじっと見つめてくる視線はなに？

モヤモヤは一旦置いて私も学校に行こうと、上着を羽織ってバッグを持った。

お母さんに声を掛けて玄関に向かう途中、兄の部屋の前で、ふと立ち止まった。ノックをしてドアを開ける。

兄はいた。子供のときから変わらない姿で、今日も。

椅子に座って両手をお腹の上で組み、ぼんやりと天井を見上げている。唇から微かに涎が垂れていた。

寝ているときを除いて、この格好以外の兄を、私は見たことがない。正式な病名は舌を嚙むくらい難しいけど、要するに運動機能が働かない難病だ。ただ生きてるだけと悪口を言う人もいる。

ちよつとでも疑った自分を恥じた。兄が動けるわけがないのに。

ハンカチで兄の口許を拭くと、「じゃ、いつてくるね、お兄ちゃん」と部屋を出た。

あの視線のことは気にしないようにしよう。きっと疲れてるんだわ。

2 飛ぶ思念

私が福祉系の短大に進学したのはきつと、難病で全身が動かせない兄の存在が影響していると思う。

幼い頃からずっとあの状態の兄と、愚痴ひとつこぼさず看護する両親の姿を見てきて、私も兄のような人を支えてあげたいと思ったのだ。

授業は結構たいへん。介護実習はへとへとなるし、座学も覚えることがいっぱいある。おかげであの視線のことはすっかり忘れていた。

思い出したのは、図書室の側を通りかかったときだ。

ふと思いついて、精神医学系の本棚を眺めてみた。

何冊かパラパラとめくっていると、「思念」という単語が目についた。人の想いが場所に残る「残留思念」。遠くの相手に思いを飛ばす「思念伝達」。

遠くへ思いを飛ばす……？

「まさか……ね」

3 お風呂場の視線

次に気づいたのは、入浴中だった。

例の視線を感じるのは、トイレやお風呂に入ってるときなど、裸かそれに近い姿のときが多い。

この日は特にはつきり感じた。まるで強い念が空中に浮いている気がする。

あの天井の辺りかな……？

例の「思念を飛ばす」という言葉を思い出した。思いや欲望が飛ん

で相手が気づくことって、ありそうな気がする。

例えば、ミニスカートを履いているときなんか、街で男の人から見られていると、すぐわかる。いやらしい視線が、まさに飛んでくる感じ。

例の視線も、どこかそれに近いものを感じる。でも不思議と嫌な感じはしない。なぜだろう。

私は湯船の中で体勢を変え、「それ」に向き合うように、天井を見上げた。体育座りの格好で膝を抱え、心の中で語りかけてみる。

「あなたは何、もしくは誰なの？ 私に何の用？」

しばらくすると、ふっと気配が消えた。
いったいなんなんだろう。

また肩までお湯に浸かって、ぼんやりと天井を見上げた。不思議な
体験をしたはずなのに、全然怖くはなかった。

4 ある決断

数日後、両親が揃って外出することになった。

家で兄と二人だけになるけど、子供の頃から食事や排泄の世話をしてきたから、問題はない。

ふと、ある考えが閃いた。試すとしたら、今夜のこの機会しかない。

夜になり、家事を終えると、私は兄の部屋に向かった。ノックをしてドアを開ける。

もちろん、兄はそこにいた。動かない手足で、定まらない視線を宙に飛ばした姿で。

もし兄が誰かに何かを伝えたくなったら、いったいどうするんだろう。声も表情も身振りもダメなら、あと残っているのは……。

「私、お風呂に入ってくるね、お兄ちゃん」

そう言って、ドアを開けたまま浴室に向かった。

服を脱いで体を洗い、肩までぎぶんと浸かる。天井を気にしながら、少し考えた。

もし本当に、お兄ちゃんが私を見たがっているとしたら……。それを確かめる方法が、ひとつだけある。

ふっと、天井の一角が揺らいだ。

「あれ」だわ。あそこから見ているんだ。

私は湯船の中で座り直し、それを正面から見上げる形で、体育座りになった。

ゆらゆらと揺らめくお湯の中で、そっとおっぱいに手を添える。

乳首が勃起していた。ちよつとつまんでみる。

「あん」

びりっと電気に似た刺激が走る。普通にさわるよりも、ずっと感じ

た。どうしてだろう。

「これも見てるの、お兄ちゃん……？」

湯船の中で、そっと両膝を開いた。

恥ずかしくて膝がガクガクする。だって、裸で自分から脚を開いて股間を見せるなんて、いままでしたことないもの。

ドキドキして、心臓が口から飛び出そうだった。

5 見てて、お兄ちゃん

お湯の中でそれぞれの手を胸と股間に添え、ゆつくりと動かしながら、天井を見上げた。

硬くなった乳首をコロコロと指先で転がすと、自分でも驚くくらい、エッチな喘ぎ声が漏れてしまう。

「あっ……んんっ」

すごい。夜中にベッドで一人でするのより、ずっと感じて、勝手に体が震えてしまう。

「なんで、こんなに……気持ちいいの……」

股間に添えている手で、ぷっくりふくれているクリちゃんをそつとさわってみた。それだけでもう、びくん！ とするくらいの刺激が全身に走る。

「やあつ、すごく感じるう」

指の動きが止まらない。

お湯の中で触れるクリちゃんはどんどん膨らみを増し、くにくにと捏ね回すたびに、体に電流がびりびりと走る。

「気持ち………いいっ」

こんな快感、初めてだった。
どうして？ あれに見られてるから？

浴槽に突いたお尻を少し浮かして、ざぶりとおっぱいをお湯から出した。それに手を添え、天井に見せつける。

「り、理沙の乳首、こんなに勃起してるの。こんなふうになると、気持ちいいのかな」

指先でビン！ と弾いた。

「あうっ！」

強烈な刺激に、ばしゃばしゃとお湯を揺らして悶えてしまった。

すごい。こんなエッチなこと、自分からしちやってる。

二十年生きてきたなかで、いまがいちばん興奮している。

おっぱいを晒したまま、お湯の中に両手を潜らせた。開いている両脚の付け根をまさぐる。

片手でクリちゃんをぐりぐりと捏ね回した。はあはあと息が荒くな

る。

「あああ、いい。オマンコ気持ちいいよお」

中に指を入れるのは、さすがに怖い。

代わりに私は腰を浮かし、浴槽の縁に両脚を掛けた。

お湯の中でゆらゆら揺れる大股開きの股間を、天井に見せつける。

「すごい。お兄ちゃん、こんなにエッチな理沙を見て」

そう言っていると、見せつけている股間のクリちゃんを、ぐにぐに、ぐにぐにとこすり始めた。

「はああん！　いいつ、気持ちいいつ。これすごいのおおお」

気持ち良くて、体がバラバラになっちゃう！

「イク、イクの。見られながら、理沙、イっちゃうのお」

私は天井を見上げて叫んだ。

「見て、お兄ちゃん。理沙がイクところ見てえ！」

気のせいか、天井の気配が揺らいだ気がした。

「あああ、イク、イっちゃうよお兄ちゃん。イクうううう！」

ざばん、と大波が来て、湯船から大量のお湯があふれでた。イキはてたあと、私はしばらく呆けたまま、動けずにいた。

6 一緒に気持ち良くなろう

放心状態からやつと戻ると、私は手早く体を吹き、バスタオルを巻き付けた。

まだ髪がびしょびしょに濡れたまま、兄の部屋へと歩く。開いたままのドアから飛び込んだ。

兄はいた。いつものように。いつもと同じ格好で。ただ一ヶ所、いつもと違うところを除いて。

ズボンの股間が大きく膨らんでいる。

私は兄に近寄ると、ためらいなくズボンを脱がせ始めた。いつも介護実習でやってるように。

下着だけにしたとき、ハッと息を飲んだ。
テントのように勃起しているブリーフのてっぺんに、大量のシミが
できている。

お兄ちゃん、射精してたんだ。

さわることもできず、私を見ていた、その興奮だけで。

思わず口許を押さえた。嗚咽が漏れ、涙が勝手にあふれてくる。

「お兄ちゃん……ああ、お兄ちゃん」

ぽろぽろと泣きながら、私は兄の頬に手を伸ばした。そっと撫でる。それから腕を広げて、ギュッと頭を抱いた。

「ごめんね、辛かったね。そうだよ、私たちと同じだもん。性欲だつてちゃんとあるよ。ずっと気づかなくてごめんね」

兄は抱かれたまま、動かずにいた。何か言いたくても、言えないまま。

私はいったん抱えている腕を離して、少し後ろに下がった。体に巻いたバスタオルを、はらりと床に落とす。20歳の女の子が、

一糸まとわぬ全裸になった。

再び腕を伸ばし、今度は素肌で直接、兄の頭を抱きしめた。押し付けたおっぱいに、兄の鼻がめり込むのがわかる。

「いいよ、お兄ちゃん。私でよかったら」

おっぱいの先を兄の口元に持っていた。硬くなった乳首を唇に押し当てると、唾液がぬらり、とそこを濡らした。

「あん……」

私は甘い喘ぎ声をあげ、もう一度、兄の顔を強く抱き締めた。

二人で気持ちよくなろうね、お兄ちゃん。

3,
7
1
1
字 (了)